

## 抑留記

北海道 長尾 忠也

### 一、我が青春の軌跡

いまや「満州」という言葉は日本国民から忘れ去られようとしている。これは歴史的に必然の姿であろう。

昭和の初期は世界的な経済的不況と、特に東北地方は相次ぐ冷害と凶作に農村は疲労困憊の極に達していた。

現代社会から想像もできないようなおびただしい社会であった。大学を出ても職なく、給料も遅配し、欠食の子供達。娘の身売り等が毎日のよう

に新聞紙上を賑わした。

この農村社会の貧困の根本的解決策として、また、軍部が極東の国防上の必要からも「満州は日本の生命線」であると主張された。

満州開拓の進められた理由は二つあった。その一つは農民を主とした武装移民であり、二つ目は満州開拓青少年義勇軍の編成であった。

その意味からしても満州開拓は日本の国策でもあった。

「大陸へ」「満蒙へ」と理想と希望を抱いて人々は開拓団を組み、この地に向った。「ここで生き」「ここで根をおろそう」とやって来た。満州開拓青少年義勇軍を含む開拓団関係者数は三十二万人とも言われている。

昭和十一（一九三〇）年八月、当時の広田弘毅内閣が満州国開拓を国策として取り上げた。満州開拓青少年義勇軍制度は一九三七年十一月、閣議で決定された。翌一九三八年四月、第一次の隊員が寧安訓練所に入所し、七次にわたって八万七千人を送り出した。

この訓練所で「民族的大行進」の先頭に立つ組織として、自給自足しながら精神教育や軍事教育がなされ、三年後に義勇隊開拓団をつくっていった。

当時の少年たちはどうしたら国に奉仕できるか。その希みは少年航空兵か満州開拓であった。私は青森県弘前市の郊外の小作人の一女四男の末子として出生した。二歳の時に母親は産後が悪く四十歳でこの世を去った。父親は四十一歳で働き盛りであった。周囲から後妻の勧めがあったが、子供たちを素直に育てるためにと固辞したようだ。昔の父親は子どもとの意味関係は強く結ばれていたような気がする。七十三歳でこの世を去ったが独

身をとおしていた。つまり、昔の親は厳父であったが、子ども思いで「思いやり」の親たちであった。私と父の二人家族であったが、話し合いはよくやり順調な生活で少年期を過した。

十四、五歳の高等小学校卒の少年で零細小作農の農家に育って、旧制中学校に進学できない少年にとつて、満州の広野に渡って十町歩の自作農になることは、大きな夢でもあった。

五族協和、王道樂土建設という大義名分を信じ、理想の農村社会を満州に実現しようという夢を抱きつつ、私は十五歳の早春、満州開拓青少年義勇軍に応募した。

昭和の「白虎隊」「第二の屯田兵」だと満蒙開拓青少年義勇軍について、当時の新聞や雑誌は書きたてた。

国や各県は青少年義勇軍の応募者を集めるために一生懸命であった。私の場合は担任が来家されてのすすめであった。

満州の広野と赤い夕日に憧れた軍国少年だった。

当時は国民は挙げてこの少年たちを出征軍人なみに送り出した。まだ両親の恋しい紅顔の美少年ばかりであった。いたいけな少年を主体として青森県と北海道の混成中隊として二百四十人の山村中隊の編成であった。中隊長は青森師範出身の山村智求氏であった。

内原の朝は少年たちの一斉に唱える義勇隊の綱領の礼拝の声とともに明けていった。「皇国精神」を徹底的にたたきこまれた。そのためには朝夕の礼拝と訓話は生活の真髄をなすものであった。

三日に一度は回ってくる不寝番勤務は発育期の眠い目をこする。夕食後の気魄のこもった詩吟は内原訓練所の松林に木霊する。内原訓練所では二カ月の基本訓練の他に、一カ月の所外訓練があった。この訓練中は多くの父母が来所された。

しかし、私は母の姿のないのに心が淋しかった。子どもにとっては、まさに孤独感におそわれるものであった。

三カ月間の基本訓練も事なく終了し、希望に満

者を養成する満州開拓嚮導訓練所（甲種農学校）を受験することになった。満州開拓青少年義勇軍の訓練所より選抜された一、二人が入所する訓練所であった。場所はハルピン市の郊外に在った。その試験に見事合格した。

私はこの嚮導訓練所に三期生として入所した。当時の私はただ無性に勉強しなかった。勉強のできる環境をひたすらに希求したのである。坂本龍彦氏の著書『岩間典夫の半世紀く祖国まで』の中に、嚮導訓練所について、「ロマンに憧れ松下村塾といわれて研鑽していた」と記述している。私はこの嚮導訓練所を卒業した。

昭和十七年、満州国立の指導者養成のために、農業大学及び高等農村学校の農学部、獣医学部を参考にして、満州開拓指導員訓練所の開設を見るにいたった。（興農部会第十九号指定）

私は嚮導訓練所を卒業後、この訓練所の本科生、農学部に入学した。この訓練所は在学徴兵が延期になっていた。

ち溢れる若き友百四十人は六月二十四日意気揚々として、数多くの関係者に見送られ内原訓練所を出発した。港に着くと四、五〇〇トンの満州丸が私達を壮行するかのよう待っていた。

私達の目的地は濱江省一面波義勇軍訓練所であった。私達は以前に指示された通り整然と列車を降り、隊列を組んだ。日満国旗を先頭に、見慣れぬ土の家の建つ異国の泥道を歩き始めた。山越えし三里歩んで私達の訓練所の第一歩を踏み始めた。初めて見る満州、文字通り広漠千里そのものであった。宿舎の中は土壁に消石灰を塗り、天井は紙張りになっていた。ランブ生活で、暖房はペーチカが宿舎四カ所に設置されていた。敷物は私達の見たことのない畳を潰して開いた様な物を巧みに編んでいる「アンペラ」と言うものであった。

ここでは一年間の訓練所の生活を送った。私は運よく、中隊長の官舎当番に選ばれた。日常生活は中隊長の妻と子どもたちとの生活であった。ここで勉強する機会を与えられて、満州開拓の指導

## 二、ソ連軍侵攻

昭和十七年十二月に学徒動員令によって、この訓練所にも学徒動員が下った。私は琿春第一三一二五部隊の井上中隊に現地入隊した。毎日、ソ連軍の戦車に備えての塹壕掘削や川の土手の上に深さ百七十センチほどの「タコつぼ」を一つずつ掘る毎日であった。

満州の夏は晴天続きで、二四、五度の暑い日が多かった。班長の命令で全員が上半身裸で作業にあたった。

昭和二十年に米・ソ・英の三カ国の首脳がヤルタ会谈を行って、ソ連の対日戦が秘密裡に決定されていた。そのことに関連して、ソ連は日本に対し、日ソ中立条約の一方的破棄を通告してきた。欧州におけるドイツの全面降伏。ソ連は欧州の戦線から兵力をシベリアへ移動し、極東軍を増強して対満州侵略の機会をねらっていた。

六日の広島原爆、九日の長崎原爆と相前後して、ソ連は極東の大軍を満州の領土に侵入させて来た。

私達兵士には何も知らされていなかった。日本の飛行機かと見ていた。その飛行機が時々腹の下から火を吐きながらこちらに向って来たのを見て、ソ連の戦闘機であることが分かり塹壕にもぐり込んだ。

戦いが日々激しくなっていた。私も若き日に死線を越えてきた。それは戦争という一つの足跡であった。私は井上中隊の模範兵であった。そのためか井上中隊長よりある時命令が下った。井上中隊長は早稲田大学のラグビー部の主将との事であった。それだけに体格はすばらしかった。

ソ連軍の陣地攻撃の先兵として、三人の中の一人に選ばれた。山形県出身の高橋軍曹と当時十九歳だった志願兵の大森君とであった。

井上中隊長の前で「長尾君、君とは今日でお別れだ」と言って、中隊長の水筒の口で酒を酌みかわした。

ダイナマイト三本をミカン箱に入れて背中に背負った。体全体がどしりと重かった。三人で敵

った人、足を失った人で一杯だった。その人達が「水を下さい」と寄りすがってくる。私が水筒の水をあげると「ありがとう」と言う。その光景は今でも私の脳裏から離れない。

武装解除のため武器を捨てた。持ち物はほとんど取り上げられた。その後「シラミ」防止のために、ソ連の女医に陰部と脇下の毛を「カミソリ」で剃りおとされた。男としてこれほど辱められたことはなかった。

終戦により関東軍はソ連軍の捕虜になった。私は琿春（コンシュン）からシベリアの収容所に送られるという事は聞かされていた。地域はシベリアの南方のコムソモリスクであるという。この地域に到着するためには程遠い地域である。アムール川を渡らなければいけない。大変であった。

当時は列車であったが、列車といっても貨物列車であった。一両に六十人が詰められた。窓もない貨物列車なので車内の空気が悪いし、一番弱ったのは用便のときである。いっどこで停車するか

陣地に乗り込んだ。飛び込もうとした瞬間に照明弾が一面を真昼のように照らした。高橋軍曹がすぐに「長尾君どうする」と問われた。私は即座に「駄目だ」と返答した。大森君は「軍曹、今ちょっと待って、その次に飛び込もう」という返事だった。私は当時二十歳だった。多少恐怖心も心の中にうずまいていた。すぐにその場を引きかえした。翌朝が終戦であった。大森君は翌朝も戦闘に参加し、ソ連の狙撃兵に撃たれ死亡した。分隊十五人の仲間も全員死亡した。

考えてみると、人間の運命というか「生きる」という事がいかに瞬間的なものであるかという事が知らされた。私の二十歳という青春は戦争そのものであった。

八月十五日午後二時ころ武装解除の連絡を受けた。大隊本部に集結のために小高い丘を、三八式歩兵銃を肩にかけ登った。だれもが顔色を失い、言葉にもならなかった。大隊本部は前日ソ連の低空飛行に遭い、あたりは血の海であった。手を失

知らされない。それには困った。

貨物列車だけの輸送ではない。列車から降りると行軍である。何十キロも歩く。夜は野宿なので、寒さと飢えに体が衰弱してくる。行軍に対して自分の身体をもつのがやっつである。野宿のときには寒さのために火を焚いている。或る仲間は一晩中寝ないで火の番をしていた。その仲間達は寝ないので、行軍の途中で倒れて死亡していった。行軍の途中でバタバタと倒れて行くが、それを助けることは自分の体力もないので、元気づける勇気はなかった。私は野宿のときには、積極的に睡眠をとった。それが行軍に耐える力になったし、生きる力にもなった。仲間の中には途中で食料に飢えていたためか「馬鈴薯」と思って拾い懐に入れた。溶けたら馬糞であった。今考えると一つの笑い話になるが、当時の食料事情としては「生きる」ための方策でしかなかった。

途中何人かの仲間が命を絶ったが、ようやく中隊がコムソモリスク収容所に着いた。辛い日々で

あった。この収容所は出入口に衛兵のいる門番があった。周囲は柵で囲まれており、四方四カ所に望楼があり、衛兵が監視している。衛兵所を出る人は中隊長と通訳だけであった。この収容所はかつてスターリン政策に反対した政治犯の収容所だったという。民間人が何人かこの収容所に入りにしていたが、その人たちは刑を終えた人たちであった。従って彼等は、スターリンの悪口を言ったりすぐに刑になると言って、首に手をやる動作をする。これも特徴の表現だった。

収容所は一棟三十人収容であり、二段ベッドだった。私は下段であり、上段から夜になると「南京虫」がポタポタと落ちてくる。身体に吸い付いて血を吸う。これが毎夜であり、これには参った。

捕虜の食料は一日三五〇グラムの「黒パン」と米粒の五く六粒が入ったスープだけだった。食事時になると、お互いの食器である缶詰の底をついて広くする。そうすることによって、多少スープが多く入る。考えてみると人間の食べ物がなくな

った。収容所には病院などの治療する施設などはない。収容所には病院などの治療する施設などはない。

丁度その時、収容所のパン工場で働いていた斎藤上等兵から、パン工場に来て働かないかと言う声がかかった。彼はかつて召集前には銀座でパンの職人をして働いていた人であった。

考えてみると、収容所の重労働で食料にも飢える状態の仲間にしてみると恵まれた環境であった。このパン工場は収容所の仲間のパンと、ソ連人の衛兵やそして将校のパンを生産する場所でもあった。

パン釜は煉瓦作りの旧式のものであった。先ず薪を炊いて釜をあたたため、その残り火でパンを焼く方法であった。収容所の仲間のパンはライ麦の黒パンで、ほとんど精白しないそのものであり、焼き上がりは従って真っ黒になる。将校のパンは小麦粉の白色パンであった。一週間に一度麦粉がパン工場に運搬される。パン工場の管理者はロシア人で、元はこの収容所に政治犯として収容され

った時には、人間としての感覚でなくなる。動物と同じである。人間としての価値判断がなくなる。その時こそ、日本に帰ったら白菜に大根の漬物だけでよい、腹一杯食べたいものだと考えた。人間としての価値観や思いやりの心など持つことができな

い。収容所の労働は身体の強弱によって区分される。上位から伐採作業、農作業、収容所の雑役、このほかにパン工場、床屋、風呂当番に割り振られる。私は最初に伐採して木を製材する作業にあたった。しかも、全作業とも細かい「ノルマ」があった。

これは大変厳しくつらかった。

当時のソ連社会にスタハノフ運動というのが盛り上がっていた。炭鉱労働者だったスタハノフ氏が、一般炭鉱労働者の二十五倍の石炭生産を成し遂げたのだったという。それだけに当時の捕虜にはノルマが厳しかった。

私は製材業に従事していたが、作業中の丸鋸の歯に左手親指がかまれて、二カ月ほど休養してい

た。刑の終了した人であった、毎朝パンの製造内容について検査に来ていた。一昼夜に四回ほど釜にパンの材料を出入するので、夜にうっかりして寝過ぎしてしまう事もある。その時は不良パンができる。その時は管理人だったソ連の民間人に苦言される時もしばしばあった。

当時の私はパン工場で働いた関係で食料には事欠かなかった。六十キロに丸々と太っていた。収容所の仲間にはすまなかったと思っていた。仲間達は夜八時頃になると「パンを多少恵んで下さい」と言って訪ねて来た。何度か分け与えてやった。当時の収容所の食料事情からしてやむをえなかったと思う。

収容所の仲間としてみれば、日常重労働の上に、「ノルマ」という過酷な生活で飢餓の生活から解放したいという心境であったであろう。

シベリアの冬の寒さは零下四〇度という厳しい冬であった。時には零下五〇度になる事もある。私はかつて旧満州（東北地方）のハルピン市で三

年間生活していた経験がある。その当時は零下三〇度であった。しかしシベリアの冬の寒さはそれ以上である。捕虜の日本人達は誰しも一日も早く日本に帰りたいという心境であった。ソ連人はダモイ(帰国)という言葉で捕虜達を誘導していた。

収容所内では軍国主義の体制が続いていた。その中から民主運動がどこからともなく湧き起こってきた。浅川君という若い上等兵を中心にして収容所に立ち上ってきた。収容所内では改革派と中隊長との間で団体交渉が始まった。そうした情勢の中で、浅川君から「リーダー」の養成のためにと言われた。私にもその矢が射ちとめられた。「コムソリスク」の現在の収容所から「ハバロフスクの収容所」に異動する事になった。井上中隊の四百人の中より一人選ばれた。そのいきさつはよく分からないが、私はパン工場をやめてハバロフスクの収容所に向うことになった。

このハバロフスクの収容所はシベリアの日本人捕虜収容所から一人ずつ選出して、ここに集結させていた。「逃げませんから大丈夫ですよ」と言うと、彼も「これが私の仕事ですよ」と言う。この舞鶴で二カ月間監禁された。舞鶴から出身地の弘前市の郊外に帰還した。父親は我が子の帰るのを楽しみにしていた様であったが、親子で面会することなく、二カ月前に死亡していた。これが何よりも淋しかった。帰還したらずぐに訪れた人がいた。「日本共産党弘前地区委員会です」「是非共産党に入党して下さい」との誘いがあった。聞くところによると、ソ連からの連絡でリーダーとしての名簿があるのだと言う。それには哑然とした。

私の青春は戦争そのものであった。戦後六十年、戦争の真実を若き青年層に証言し続ける責任があると思う。ソ連に抑留された私達の過酷な労働と、飢えや寒さ、収容所のいじめ、人間性を失う体験などを、多くの執筆活動として出版されているけれども、語り継ぐことによって、戦争というものが人間の命を奪う過酷さと、その罪を明らかにする必要がある。決して風化させてはならない。

せていた。この収容所の目的は、日本に帰還したり、日本共産党の指導者として活躍させようとした収容所であった。私はなんで選出されたのかよく分からなかった。

このハバロフスクの収容所では、重労働やノルマ等は一切なかった。朝から夕暮れまで学習生活であった。「ソビエト共産党史」や「マルクス弁証法」や「資本論」などの学習であった。当時の講師はソ連の軍人(共産党員)や捕虜だった東大の元教授等であった。徹底的に社会主義や共産主義の教育であった。私はこの収容所で三年八カ月の教育をされた。教育の力がいかに人間の理性を変化させるものであるかを知らされた。

二十四年七月、ナホトカ港から引揚船「明優丸」で舞鶴港に帰還した。舞鶴ではアメリカ兵の二世に取調べを受けた。ソ連の軍事基地や、ソ連での教育の内容等であった。日本の警察官が便所に行く時も付き添っていた。それほど思想犯罪者として取り扱われていた。私はその警察官に対して

さて、軍隊生活や抑留と空白が続いて、出遅れた戦後社会での生活基盤作りについて述べてみたい。帰還後、田舎に帰り早速就職を求めに職業安定所に通った。安定所の就職係官が履歴書の卒業学校を見て、満州国立開拓指導員訓練所農学部ですねと言う。「はい」と答えた。当時引揚げて来てから、外務省に出向いて卒業証明書を受領していた。

そこで、青森県農業協同組合連合会を推せんしてくれました。早速面接におもむいた。当時の連合会の係員の面接官から「あなたは今何の政党を支持しますか」との問いに対して、私は即座に「日本共産党です」と答えた。農村社会、特に青森県は保守党であった。その事を考えずに答えた事が失敗だった。その時は帰還して間もない時でもあり、ソ連時代の学習訓練がまだ体、脳裏から離れていなかった。

いつの時代でも教育の果たす役割が人間の価値判断を変える条件になるものだと感じた。

そこで、改めて学習を初めからやり直すことが必要だと考えた。当時外務省の通達では外国の大学卒業者の取り扱いとして、日本の大学へ転入学する場合には、国立大学であれば学部が同じであれば試験免除で入学できる特別措置制度がされていた。

私も農学部であったので、希望としては、国立大学であった東京農工大学を希望していた。大学に早速連絡をとったところ、大学側の意見としては「抑留生活があるので、あなたの学力では私の大学に入学しても、ついて行けないのでは」と言う返答であった。そこで考え直して、私立大学の受験を考えた。私立大学に合格した。

実は函館に実姉が生活していた。子どものない家庭であった。養子に入籍してくれるのであれば、大学の入学資金は援助してもよいという事であった。私は姉の好意に甘えることにした。ちょうどよい具合に兄が東京で生活していた。兄は旧国鉄の横浜用品庫の用度課長をしていた。兄には

当時五人の子供がいた。そこに下宿の名目でもぐりこんだ。当時の国鉄の官舎は東中野にあり、二階建てで部屋は二間しかなかった。それなのに私に一部屋を与えてくれた。子供たちは押し入れに寝かせてくれていた。兄は兄弟の中でも、もっとも弟思いの人間であった。そこで四年間の大学生活をすることができて大学を卒業した。大学の学部は経済学専攻だったので、企業の金融関係に就職した。しかし、夜のネオンには心が勝てず失敗した。

兄は言う。田舎に帰って学校の先生でもしたらと言う事から、企業を辞して田舎に帰り学校の教員になることを決めた。釧路市内の中学校に三十二年間勤め、そのうち十四年は中学校の校長を務めた。

退職後は私立の高等学校の校長、専門学校の校長と十年間務め上げた。この間、民生委員、児童委員も十六年間務め上げた。

### 【執筆者の紹介】

大正十四（一九二五）年生まれ。満州国立開拓指導員訓練所本科農学科卒。

在学中、学徒動員により彈春部隊に入隊。終戦後四年シベリア抑留後、一九四九年復員引揚。一九五四年、東京経済大学卒。

釧路公立中学校に三十二年間勤務。この間、釧路市立春採中、共栄中、弥生中各中学校長を十四年間務める。退職後、学校法人北海道学院釧路学園理事。釧路高等経済商業学校校長、釧路専門学校校長、釧路愛国幼稚園長も務める。

#### 〔受賞、表彰実績〕

教育新潮賞、下中教育賞、第一法規教育賞（四回）、文部省科学研究補助金交付（三回）、北海道科学研究助成金交付（二回）、読売教育賞候補賞（北海道教育委員会推薦）など受賞実績三十六回。

北海道中学校長会創立四十周年記念役員功績表彰、北海道特別活動研究会役員功績表彰、北海道、札幌市教育振興会創立二十周年記念役員功績表彰、

釧路市民生・児童委員協議会会長顕彰、釧路法務局長表彰（二回）など表彰実績三十二回。

#### 〔主な編著書、論文〕

郷土読本「くしろ」初版編集執筆。釧路教育三十年史。「学校経営」（第一法規）「学校運営研究」（明治図書）「道中だより」（北海道中学校長会）

「教育振興」（北海道、札幌市教育振興会）「学校経営」（教育新報社）

北海道新聞社、釧路新聞社、日本教育新聞社など執筆三百余編。

#### 〔現在社会における活動〕

民生委員、児童委員。釧路市民生・児童委員協議会総務。北海道、札幌市教育振興会釧路市支部副会長。文部省教育改革モニターなど。

（北海道 五十嵐 甚吉）